

体操競技における技の概念規定に関する モルフォロギー的研究

金 子 一 秀

1. 技の発生をめぐる概念規定上の混乱

(1) 技の発生形態

我々が体操技術の発展のあとを辿ると、そこには、従来の技とは異なる全く新しい独自の形態を示すものと、従来の技と同系の構造を持つが、技術の改革により、一見他の技と見まちがうばかりの素晴らしい出来栄を示すものがある。前者の例としては、背面とびこし懸垂 (Aus Riesenfelge rw. : Vschw. i. Hg. u. Übergrätschen rw. u. Wiederfassen z. Vschw. i. Hg.) の発生が挙げられよう。また後者の例としては、発生当時のシュタルダー (J. Stalder) によるシュタルダー (freie Grätschumschw. rw. i. d. Hstand.) から、現在のシュタルダーへの技術変遷を辿るなかに明らかに示される³⁾。

技の発生には、全く新しい構造を示す原形発生と技術の改造により形態的に何等かの変化を示す改造発生という二様相が存在するのである²⁾⁸⁾。このような二様相を呈する技の発生状況の中で、技として成立するには当然その課題が明確にされなければならない。現在のように練習環境が整備され難しい技を安全に、かつ、十分に練習できる環境を持つと、その技の発生は、たとえ高い習熟に至らなくても、単なる風変わりさだけを誇示するものを含めて数限りない。

これらの多くの技の発生に伴い、技の構造を的確に捕らえ、その課題を明確に規定するような研究が日増しに立ち遅れを見せている。このことにより、体操競技の基礎となる技の概念に混乱を巻き起こし、技の評価や採点、或いはトレーニングの方向性に問題を投げかけているのは周知の事実である。

(2) 技の概念規定上の諸問題

我々が技の構造をとらえるときには、技の運動形態的構成要素と、技の運動技術的構成要素の二拠点が必要となる³⁾。これらの二拠点から、新しい技が他の技と構造的に截然と区別され、将来的可塑性を持ち、時代を超えて生き残りうる技であるかどうかの緻密な考察が行われる。現在出現している技の多くはその場限りの一時の珍しさを誇示するような傾向にある。しかし、このような技は“うたかたの技”として、時と共に消え去る運命にある。しかし、これらの技が消え去るまでには、体操競技のコーチングや審判活動に多くの傷跡を残していくのである。この傷跡をまさに隠すかのように、現在の技の課題は人名によってすりかえられていることもある。発生当時、全く新しい技として世界的に認められた技で、人名を付けることによりその構造分析を避けた結果、多くの問題を生み、その波紋を広げている技もある。その代表的なも

のがマジャール・シュピンドル (Magyar-Spindel) である。この技は、採点規則上も Magyar-Spindel としか表記されていない。しかし、この技には、二通りのやり方が存在する。つまり、入れひねりと抜きひねりである⁸⁾。技の課題を明確にせず、人名を付け図解させた場合、個人のやり方が技の課題とすりかわってしまうという、構造体系論上の大きな問題が生じるのである。図解されていない入れひねりの技は、マジャール・シュピンドルとして位置づけられないのであろうか。さらにこのことは、あん馬のひねり技に多くの混乱を巻き起こしているのである。

ここにおいて、我々は改めて技の概念規定をめぐる諸問題にメスを入れ、トレーニング並びに審判活動上の混乱解消の一翼を担おうとするものである。

(3) 本研究のモルフォロギー的立場とその問題意識

我々が運動を対象として、研究を行う場合、まず第一に運動をどのような視点からとらえるかを前景に立てなければならない。この視点は大きく二つに分けられる。一つはいわゆるバイオメカニクスやサイバネティクスに代表される量的な世界に向けられ、もう一つはモルフォロギーに代表されるような質を含めた構造全体に向けられる。この二つの視座の関係についてベターゼンは「運動研究における質的方向と量的方向の関係は、量と質の弁証法的関係に相応することになる¹²⁾」と述べている。

我々が、運動を対象として研究する前提に、運動の構造を知り、それによって運動をより正確に、早く習得することへ導く姿勢、即ち、実践へ還元することを目指す構えが存在するのは疑いない。このことを前提として研究していく場合、人間の内部知覚という問題さえ取り扱わないわけにはいなくなる。特に、この面を前景に立てながら、運動の形態発生や全体構造にメスを入れていくのが運動モルフォロギーの立場であり、実践に直結する運動学として、研究者の注目を集めているのは周知のことであろう。

この研究法はマイネル (Meinel, K.) によって提唱されたものであることはいうまでもない。マイネルは「運動モルフォロギーというものは、スポーツの感覚的知覚的徴表と関わりあいを持つものである⁹⁾¹⁰⁾」と述べ、その研究法として自己観察、他者観察など興味ある考察法を挙げている。

個別運動学として、体操競技にこの研究法を導入するにあたり、まず第一に技の基本的な構造が明らかにされなければならない。さらに、個人の内部知覚に切り込むためにも、まず、技というものの全体構造が共通項として前提にされなければならない。体操競技として、研究対象となる技に構造分析的足場を持たないことには、その先の研究はなんらの意味も持ちえない。つまり、体操競技の運動学として、その基礎となるのがモルフォロギー的構造研究なのである。本研究は、特に運動面を中心にひねりと転向の関係を明らかにしようとするものである。

2. 技の概念成立を阻む諸要因とその問題性

(1) 技の概念成立の基礎要因

技の概念成立を語る前に、まず、体操競技で扱う技の特性を述べる必要がある。

競技スポーツとして現在その地位を確保しているものは大別して、測定競技 (Messung) と採点競技 (Wertung) とに分けられることは周知の通りである⁹⁾¹⁰⁾。この後者に属するのが体操競技である。この体操競技で一つのまとまりを持つものが演技であり、その演技は個々の技によって構成されている。ここで、技の寄せ集めが演技という考えに陥ってはならない。個々の技の組み合わせから一つの演技というまとまりを持った場合、そこには、寄せ集められた技の集合より以上のゲシュタルトを持つからである。ここで、演技の最小単位である技は、どんな運動のまとまりでも良いかということが問題になる。このことについて金子は、体操競技で扱う技には非日常的驚異性を持つものでなければならないと述べ多くの運動ゲシュタルトから体操競技としての技を区別している。また、その技の特性として収斂性、姿勢的簡潔性を挙げ技の特性を明確にしている³⁾。さらに、この技には最終的に技術が内包されていなければならないと、*「演技の最小単位としての運動は、その技術の習熟によってその熟練性 (Kunstfertigkeit) が高まるような特性を持たねばならない³⁾」*と述べ体操競技の概念を明らかにしている。これらの要因から技がはじめて成立するのであり、これらの条件を満たさないものは長い歴史のなかで自然に淘汰され、消滅してしまう。これらの条件を満たしたものが技としてその地位を確保しうるのである。しかし、現在、技術開発により、いままで考えもしなかった技が出現し、それにより、多くの技の境界 (Abgrenzung=Definition) が曖昧になってきている。特に、その問題が現出する運動現象は運動面とひねりの関係において顕著である。

(2) ひねりと運動面をめぐる技の概念混乱

ひねりと運動面の混乱は古く1966年のドルトムントの女子規定演技にまでさかのぼる⁶⁾。この規定は、Überschlag vw. mit 1/4 Dr. i. d. 2 Flugphase という課題を持っている。この規定の実施に関して多くの問題が投げかけられたのは周知の事実である。

本来、この運動は、助走方向に対して直交するような運動を行うか、完全に鉛直面運動とし空中で 1/4 ひねりを行い着地方向を逆にするかの二つの運動が考えられる。

つまり、この二つの運動は同じ 1/4 ひねりで着地の向きが異なるのである。しかし当時の問題は、3/4 ひねりを加え、着地方向を同一にする捌きが出現したということである。チャスラフスカはこの 3/4 ひねりの捌きによって、この試合の跳馬のタイトルをとってしまった。3/4 ひねりが 1/4 ひねりとなんら区別されなかったのは、第二局面の雄大さを出すための技術がまだ開発されていなかったと考えられる。現に、当時のチャスラフスカの連続写真を見ると完全な支えひねりである⁶⁾。この支えひねりと運動面の交差とは現在もおおきな問題として取り上げられる必要がある。このことについては、後に詳しく触れることになろう。

次に問題となるのはあん馬のいわゆるマジャール・シュピンドルである。この技は現在その変化技として *Kreisen b.B.i. Querstütz vl.a.einem Pferdende u. 1/4 Dr.u.d. Längsachse z. Kreisen b.B.i. Seitstütz: Kreisen b.B. 1/2 Dr.u.d. Längsachse i. Querstütz a.d. Pferdende* などが発生している¹⁾。この技について発生当時から鋭い考察を行った山下の論文は注目に値する¹⁴⁾。(現在まだこのことは、大きく取り上げられていないが) 山下の述べるところでは、このマジャール・シュピンドルは「反」1/2 転向であるということである。つまり旋回方向と逆への 1/2 転向である。更にこのことを深く考察すると、両

足旋回は旋回中に二回のひねりを加える。このことは、前を不変とするために行われることだが、この必然的に現れるひねりをさらに素早く行うことにより従来までなかった新しい転向方向が生まれたのである。しかし、このことは現在もなお、一般には良く知られていない。というのも、採点規則上もまだ長体軸上のひねりとしての解釈しかしていないからである。現在出現している $1/4$ ひねりはこの解釈、即ち表記上からは存在していない⁸⁾。純粋にひねりの度合いを考えると、まず、ひねりを考える最初の基本姿勢がどこかということが問題となる。当然あん馬の場合、正面支持か、背面支持かでしかない。つまりその姿勢からの $1/4$ ひねりとは技の成立する体勢には、どうしても収まらない。このことと相まって、山下の述べるように「反」転向と考える方が、否むしろ「反」転向そのものなのである。それに伴い必然的にひねりが生じるだけである。

しかし、ここで一つ指摘しておかなければならない。それは、転向の際、規定詞として「反」という表記が適切であるかどうかという問題である。この「反」とは反対のという意味を持つが転向方向は全く変わらないのである。つまり、転向中のひねりによりいわゆる“空間説”における前が転向方向と逆に移動したということなのである⁴⁾。この問題について山下は支持部の移動を転向の中核として捕えている¹⁴⁾。支持部の転向という解釈については、純粋なひねりを伴わない逆方向への転向が存在しない以上、検討の余地があると考えられる。さらにまた、（このことは山下も指摘しているが）既に考察したように、“入れひねり”“抜きひねり”によりその転向に二種類の形態が存在することも見逃せない事実である。これらの問題を解決するためには、従来の転向の概念に現象学的エポケーを行い、再びひねり技というものを含めた上で体系を組みなおす必要があろう。

特に、本論の中心となることは、空間説における前の新しい移動方向の発生である。この事実から水平面における一つの関係が明らかにされることになる。

(3) 転向とひねりの相殺関係

さきに、あん馬のマジャール・シュピンドルの出現により従来にない新しい前の移動方向が生まれたということに触れた。

「＜転向＞は、体が水平面に運動し、かつ前の方向を常に変化させて行われる運動課題を表記する基本語⁵⁾」である。また、その方向を変える度合いにより半転向、全転向、または体面先行、背面先行かで、正転向、逆転向に分類されている。この転向の概念においては常に旋回方向と空間説における前の変化の方向とが一致している。つまり従来は、足先の方と同調した転向形態を転向として全て分類できた。しかし、ここで新たに、新しい前の移動方向が出現したことにより、転向の度合い、即ち $1/2$ 転向、 $1/1$ 転向というものはいくつあるのかという問題を確認する必要がある。転向とは身体部の移動量をいうため、足先の動く度合いを転向の度合いという解釈を改めて確認した上で本論を進めることにする。

ここで、転向とひねりの一つの間接関係を考察していくことになるが、まず転向とひねりには相殺関係が成立することを指摘しなければならない。転向中に転向方向と逆のひねりを行う場合、そのひねりの度合いが転向量を越えた場合、前が転向方向と逆に変化するのである。

ここで、この相殺関係というものの解釈の仕方の基礎として、金子の用いた図式的考察法を

用いることにする³⁾。あん馬の両足旋回を例にとると、次のようになる。

あん馬の両足旋回のみねりは現象としては、明確なひねりでないことは誰しもが認めるところである。つまり、上体と下体のねじれ現象を含めて認識しているひねりである。しかし、図式的な考えにより、このねじれを純粋なひねりとして扱った場合、つまり最大粋での両足旋回は、開始姿勢を背面支持とすると $1/2$ 上向き逆転向 $1/2$ ひねり、或いは、 $1/2$ ひねり下向き逆転向と解釈できる。

現実これを実施すると現在行われているような両足旋回になる。

両足旋回においては、 $1/2$ 転向 $1/2$ ひねりということから前が変化していないということは誰しもが認める事実であろう。では、 $3/4$ 転向 $1/2$ ひねりなどの場合は前はどのように変化するのであろうか。このような例を実際の技でとらえていくことにする。

あん馬の体系分類によると、あん馬の技は上向き転向技群、下向き転向技群、移動技群、旋回技群、に分類される³⁾。ここで旋回技群、移動技群については両足旋回をベースにしているため、また、前が常に変化していないため考察の対象から外すことになる。

では、上向き転向技群、下向き転向技群においてはどのようなのであろうか。この二つの技群について考察をすすめてみよう。

1) 上向き転向技群

この技群は、金子によるとその基本的な構造分類は、片腕周に行われるか両腕周に行われるかの二系統とされている³⁾。この基本的な二系統の技が先の相殺関係をもつかどうか検討されることになる。

① 上向き正転向移動

この技は正面支持から背面支持に至る際、片腕周上の上向きの正転向移動をするものである。この技は、足先は正面から背面に $1/1$ 転向しており、ひねりは $1/2$ 行われている。また前は $1/2$ 変化している。

② 上向き正転向

この技は、正面支持から一取っ手両手背面支持となり更にまた正面支持となる。ここでは、正面支持から背面支持を一つのまとまりとし、背面支持から正面支持を一つのまとまりとして考察を加える。

前半の正面支持から背面支持までは足先は $3/4$ 転向、ひねりは $1/2$ であり、前は $1/4$ 変化している。また後半は、同じく $3/4$ 転向 $1/2$ ひねりで、前は $1/4$ 変化である。結局 前が $1/4 + 1/4 = 1/2$ という変化となる。

2) 下向き転向技群

この技群は、下向き正転向、下向き逆転向の二系統に分類されている³⁾。特に下向き正転向は、下向き体勢を変化させない転向で構成されている技なので、ここでは考察の対象とならない。

① 下向き逆転向

この技は、背面支持から $3/4$ 転向 $1/2$ ひねりを行い、正面支持となり、さらに正面支持から $3/4$ 転向 $1/2$ ひねりを行って背面支持となる。その際前は、 $1/4$ 、 $1/4$ 変化し、最終的に $1/2$ 変化するのである。

3) 相殺関係の成立

先の考察から，“転向の度合い（足先の移動量）－ひねりの度合い＝前の変化”という関係が成り立つ。つまり $1/2$ 転向 $1/2$ ひねりは $1/2 - 1/2 = 0$ で前は不変となり， $3/4$ 転向 $1/2$ ひねりは $3/4 - 1/2 = 1/4$ となり，前は $1/4$ 変化することになる。

この関係は現在流行中のあん馬のひねり技にも成立する。例えば，下の技について考察を加えてみることにする。（図1）

Kreisen b.B.m. $1/2$ Dr.u.d. Längsachse i. Seitstütz a.d.
P. od. Pferdende



図1

この技の開始姿勢は，あん馬での両足旋回背面支持である。この技は，背面支持から $1/4$ 転向し $1/2$ ひねりを行い，さらに $1/4$ 転向 $1/2$ ひねりを行うものである。この技を先の関係式に入れると， $1/4 - 1/2 = -1/4$ となる。つまり，前の方向は旋回方向と逆に $1/4$ 変化することになる。（図2）

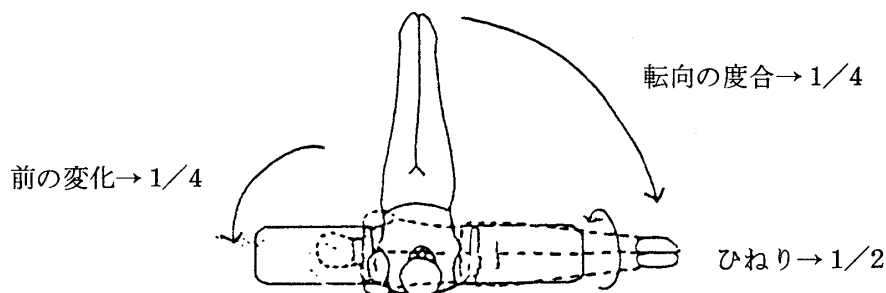
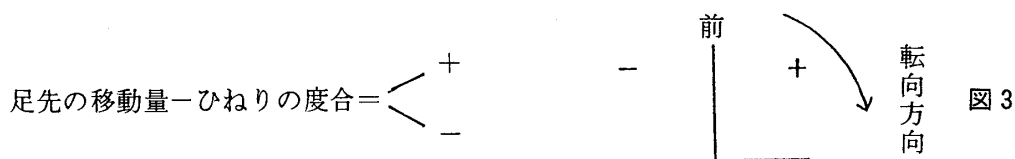


図2

以上の考察から以下のことが明らかである。（図3）



このように，転向とひねりには相殺現象が起こるのである。しかし，現実にはこの運動は完全な水平面で行われていない。そこで，水平面を逸脱した場合，この関係はどのように変化するかを考察する必要に迫られる。

(4) 面の上昇，下降における相殺関係の変化

先の図式的な考察により水平面でのひねりと転向の関係は明らかになった。ここにおいて，図式的な水平面を逸脱した場合，この関係は成り立つのであろうか。我々が転向と称しているものは，現実には支持部分と体幹部分によって構成されていると考えられる。

この支持部分を軸として体幹部分が回転するものを転向と称している。現実には支持部分と体幹部分が常に直交していることはない。例えば，あん馬などでは常に転向技の際，支持部分

と体幹部分のなす角度は90度以下である。これらを我々は転向として扱っている。つまり、図式的には直交だが、現実にはある程度の幅を持って転向を解釈していることは明らかである。

では、その角度をどのくらい狭めたなら、或いは、広げたならば転向でなくなるのであろうか。このことについては、転向そのものの持っている本質徴表が可視的な現象として明確にとらえられなければならない。この問題について、ここでは水平面の逸脱によるひねりと転向の特性を扱うことにより、その本質徴表に近づけるものと考えられる。

1) ひねり形態の多様性

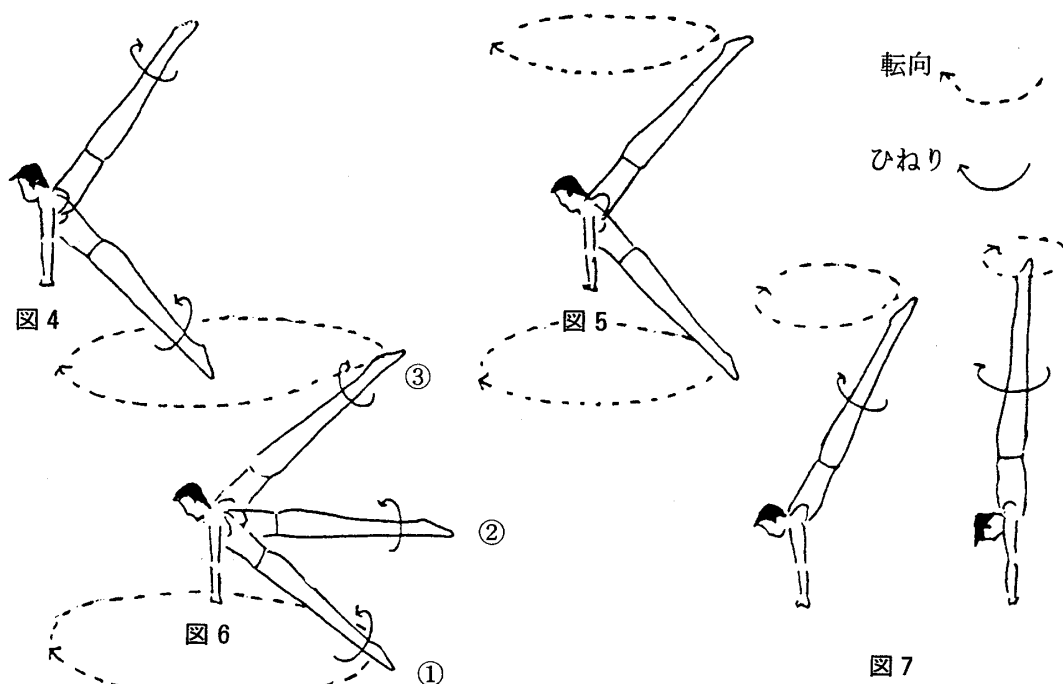
我々がひねりを扱う場合、現在二通りのひねりが考えられている。一つは宙返りと合成するような全くの空中でのひねりであり、もう一つは、支持点を持つひねりである。この支持点を持つひねりについては、鉄棒のMünchnerstemme など数多くの例が挙げられる。さらに、この支持点をもつひねりにも、厳密には二系統に分類されていると考えられる。一つは、先の例のように常に支持部分と体幹部分が一致しているひねりであり、もう一つは、支持部分と体幹部分との角度が180度以下のもの。つまり支持～倒立あるいは倒立～支持に至るまでの支えひねりである。この後者のひねりが転向形態との混乱を招くものになる。

2) 運動面の形態による相殺関係の変化

先の支持～倒立、倒立～支持へのひねりの場合、図4に示されるように、そのひねり方向は、“身体説”において常に変わらない。

また、転向面を変形した場合も、図5に示されるように、その転向方向は常に変わらない。この転向の変形した形にひねりを加えた場合、どのような現象が生じるのかに考察を進める。図6-①は水平面以下の転向とひねりである。図6-②は水平面での転向とひねりである。図6-③は水平面以上での転向とひねりの関係である。

さらに倒立位近く、また倒立位まで転向形態を変形させたひねりと転向の関係が次の図7となる。



つまり水平面での転向形態で相殺関係を持っていたひねりが面の上昇につれ転向方向と一致してしまうことが明らかである。それは次に示される関係になる。(図8)

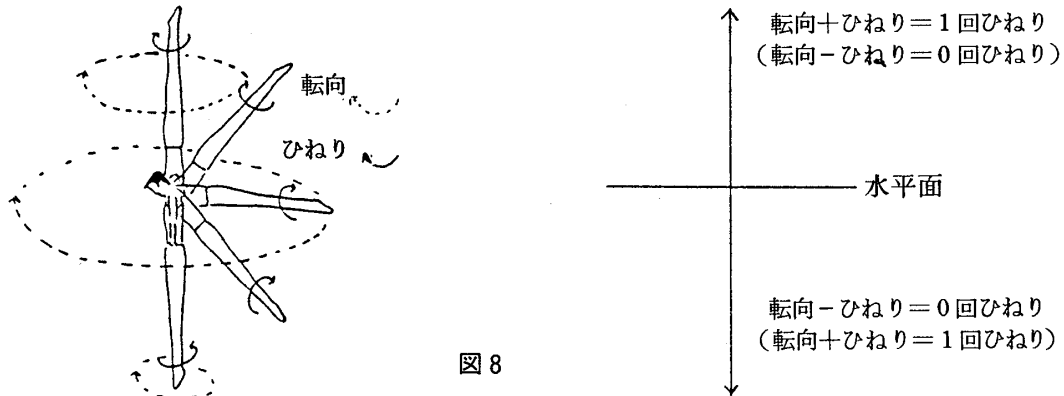


図8

水平面ではお互い消しあう関係をもつ転向とひねりがその面の上昇に伴い相乗作用が働き、さらに、倒立位では一致してしまうのである。このことは、平行棒のヒーリーの練習において、一回ひねりの感覚が出にくいことにも関係すると考えられる。また、あん馬のひねり技の練習の際、Bockで行われると、非常にうまくひねりがかけやすいことは誰も経験していることであろう。このことも足先が水平面より下がった場合相殺関係が弱くなり、ひねりを意識の前面に押し出して行わなくてすむという理由から理解できる。さらに、この関係は、支持上での一回ひねりに大きな問題を投げかけることになる。

(5) 一回ひねり概念の混乱

先に面の上昇により、転向とひねりは一致する方向にあることを述べた。この倒立位からの一回ひねり、即ちヒーリーは、本質的に転向とひねりの相乗作用が絡んでいることが考えられる。その理由として、倒立位にはもう一つのひねり方が存在するからである。つまり、「後ろ振りー倒立経過片腕支持一回ひねり支持¹¹⁾」といういわゆるヒーリーの表記について、もう一つの解釈が与えられることになる。元来、平行棒では、鉄棒と異なり握りの変化によって技を分類することはない。このことは平行棒の逆上がりにも内手と外手が存在することからも理解できるであろう。このことから以下の技が実施可能となる。(図9)

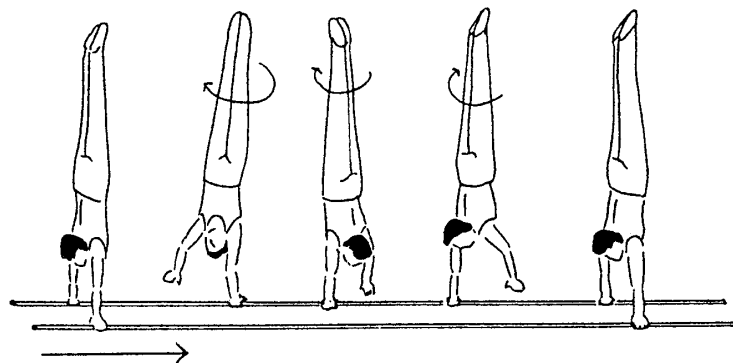


図9

このことはドルトムントの女子規定の問題と軌を一にすると考えられる。この運動面の交差現象は、課題となるひねりの度合いを減らしてしまう。更に、この問題は形を変え多くの種目に問題の波紋を広げていく。

その例としては、かかえこみや屈身の宙返りのひねりに、プレグナントを示さない場合である⁷⁾。特に顕著なのが女子の段違い平行棒におけるギンガー宙返り懸垂の実施の仕方である。ひねりと屈身とを完全に分離させた場合、この技は女子競技においてもまだ出現していなかったであろう。ひねりと屈身との合成により、段違い平行棒でも可能なほどこの技が普及したことは、ある面では素晴らしいことだが、この技の成立の境界線をどこかに引かない場合にはより良い捌きを行ったものの評価すら危ぶまれることになる。また、過去においてかかえこみの一回ひねりという技は単なる伸身の一回ひねりの失敗としか考えられなかったのに、現在では技として一つの地位を得ているのは肯定しかねるものである。技は進歩するにつれ、それに逆行するような技が発生してくるのを抑えることができないのは競技の健全な発展を妨げるものであることは多言を要しない。

このように、運動面の交差現象は有軸ひねりの度合いを変え、さらに、運動面の幅を広げることにより（ある面では運動面の交差現象も含めて）技の課題は忠実に遂行されなくなってしまっているのである。

3. 結語並びに展望

本研究において、転向とひねりに関する問題、即ち、転向とひねりの相殺、相乗関係、有軸ひねりの二面性、運動面の交差現象の問題性を明らかにしてきた。これらの基本的な諸考察によって、技の概念規定の基礎が提供されることになる。さらに、この基礎理論に基づいて、具体的な技の体系化の作業が急がれなくてはならないが、本論の射程はこの体系化の基礎の提供に限定せざるをえない。

近年、体操競技においては、技の理想像を追求する傾向が薄れ、採点側の盲点を突いて高得点に結びつけることに傾斜してしまうことが少なくない。技の構造分析はその技の習得を求める選手やコーチの側だけでなく、その技の評価をする審判員側にこそ不可欠の専門知識の一つであることに異論はないであろう。つまり、選手側と採点側とは常に弁証法的統一を求める関係にあるべきであり、これによって初めて体操競技は競技スポーツとしての発展が約束されるものと考ええる。

引用参考文献

1. F.I.G. : Wertungsvorschriften 1985 Männer.
2. 猪飼正夫(等)著: 種目別現代トレーニング法 1983 大修館
3. 金子明友: 体操競技のコーチング 1974 大修館
4. 金子明友: 体操術語における運動方向に関する研究 東京教育大学体育学部紀要 第4巻 1964

5. 金子明友：競技体操における技の表記 東京教育大学体育学部紀要 第12巻 1973
6. Kaneko, A. : Zur Morphologie der Turnkunst, In " Olympische Turnkunst " 1967 Nr.5.
7. Kaneko, A. : Zur Problematik der Bewegungsstruktur in der olympischen Turnkunst, In " Olympische Turnkunst " 1972 Nr.3.
8. 金子一秀：技の形態発生に伴う構造体系論的研究 筑波大学大学院体育研究科 修士論文 1985
9. マイネル著／金子明友訳：スポーツ運動学 1981 大修館
10. Meinel, K. : Bewegungslehre 1960 Volks und Wissen Verlag.
11. 日本体操協会：採点規則（男子） 1985年度版
12. Petersen, T. : Aspekte qualitativer Bewegungsforschung, In " Sportunterricht " 1981-1.
13. Schmidt, R. : Vom Diamidow-Kreisel, Healy-Quirl und von anderen Drehungen, In " Olympische Turnkunst " 1967 Nr.1.
14. 山下芳男：鞍馬におけるマジャール・シュピンドルについて, 岩手大学教育学部年報 第38巻 1978

Zur morphologischen Problematik der Übungsdefinition im Kunstturnen

Kazuhide KANEKO

Mit dieser bewegungsmorphologisch betrachteten Arbeit soll ein Beitrag zur erfolgreichen Entwirrung der Problematik um die Übungsdefinition geleistet werden. In den letzten Jahren ist bekanntlich, daß für die meisten schwierigsten Übungen die Längsachsedrehung nicht nur bei Flugphase wie Tsukahara-Salto charakteristisch ist, sondern auch bei Stützphase wie Healy-Quirl am Barren bzw. Magyar-Spindel am Pauschenpferd. Vor allem kann man die Probleme über die Übungsdefinition bei der Stützphase mit dem Schrauben öfters finden.

Meiner Ansicht nach soll man im allgemeinen der offiziellen Übungsbezeichnung mit dem Namen des Erfinders wie z.B. Healy-Quirl, Ginger-Salto und Magyar-Spindel unbedingt ausweichen, weil ihre strenge Strukturanalyse manchmal vernachlässigt werden kann, dann die Verwirrung der Übungsdefinition, d. h. der Umfangsstruktur eines Übungsteiles verursacht werden muß, was als notwendige Folge großer Einfluß sowohl auf die Bewertungsarbeit der Kampfrichter als auch auf die Trainingsplanung der Trainer ausüben muß. In dieser Abhandlung handelt es sich um die Verhältnisse zwischen der Bewegungsebene und Längsachsedrehung.

Nach unseren Betrachtungen muß man in erster Linie die Widersprüche zwischen der Übungsbezeichnung und dem Zustandekommen einer Übung feststellen, z.B. Handstandwende zum Stand seitlings als Pflichtsprung für Frauen bei den Weltmeisterschaften in Dortmund 1966, Kreisen beider Beine im Querstütz vorlings an einem Pferdende und $1/4$ Drehung um die Längsachse zum Kreisen beider Beine im Seitstütz usw.

Darüber hinaus sei es hierbei in den Vordergrund gestellt, daß diese den einwandfreien Widerspruch beinhalteten Bewegungserscheinung meistens im Verlauf des Zusammensetzen aus dem Wende- und Kehrschwung und der Längsachsedrehung charakteristisch für sich dargestellt ist. Auf Grund unserer scharfen Betrachtungen mit der phänomenologischen Epoche haben wir folgende Erkenntnisse gewonnen: die Kompensierungsarbeiten des Wende- bzw. Kehrschwungs und der Längsachsedrehung, die Veränderungsvorgänge der Kompensierungsarbeit beim Hochschwingen bzw. Tiefschwingen des Wende- bzw. Kehrschwungs sowie bei den gekreuzten Bewegungsebenen.

Aufgrund dieser gewonnen strukturellen Bewegungsauffassungen seien weitere Definierungsarbeiten der einzelnen Übungen an verschiedenen Geräten fortgesetzt, um die praktische Arbeit der Kampfrichter bzw. Trainer erfolgreich gewährleisten zu können. Zum Schluß sei hervorgehoben, daß die Bewegungsarbeit durch Kampfrichter und die Trainingsarbeit durch Trainer nach die dialektischen Einheit unter Mitwirkung voneinander gestrebt werden sollen, um unsere schöne Turnkunst in der Zukunft weiter zu entwickeln.